

会員の広場



白倉敬彦氏の遺作に想う

高野了乙（浜松）

白倉敬彦氏の遺作を読んだ。というより楽しく眺めた。彼は、昨年10月4日に亡くなった。享年73だった。私の尊敬する浮世絵に造詣の深い編集者、文筆家のひとりである。今年に入って家族や友人の協力で、ささやかな一冊の本が刊行された。『春画に見る江戸老

人の色事』平凡社新書。内容は、老爺の色事、老婆の色事、老夫婦の色事の三部構成となっている。

春画というと、今もってタブー視される。何か後ろめたさというか、恥ずかしさというか、くすぐったさのようなものを、多くの人は感ずるかもしれない。明治以降の西欧化、近代化のなかでもたらされた、日本人の性愛にまつわる意識や観念のゆがみが、春画の隠ぺいに繋がってきた。春画の出版が解禁されるのも、ごくごく近年のことである。しかし、現在では世界が貴重な文化遺産として評価するまでになっている。

一昨年から昨年にかけてロンドンの大英博物館で、初の大規模な春画展が開催され好評

を博した。画期的なことだった。白倉敬彦氏は、出版解禁を推し進めた人物のひとりであるが、また、大英博物館の企画展の協力者でもあった。そして同展の日本開催に奔走したが、壁は厚く実現しなかった。

遺作に、上野千鶴子さん（社会学者、東大名誉教授）が解説者として追悼の一文を寄せている。

—わたしが春画研究に興味があると知って読者は驚くかもしれない。田中優子さん（法政大総長）も春画研究の仲間のひとりだった。—春画には人の生命の躍動と面白さがある。—今では、春画は多くの女性に支持されている。「あとがき」に娘の奈保さんが、父母のむつまじい姿を描いているのも、彼の

人柄を偲ばせるものだった。

この本の図版に描かれる男女交合の姿態は、目を背けさせるものがない。どちらかと言えばほほえましいというか、若夫婦に刺激を受ける老夫婦とか、途中で萎えてしまう老爺や、ちよつといじわるな老婆など、笑いを誘うものが多い。春画に、自然体でおおらかな江戸時代人の姿を、あらためて日本人の性愛の原像をみる想いがした。

追記、最近うれしい知らせに接した。この秋、初めての本格的な春画だけを集めた展覧会が開かれることになった。会場は永青文庫（東京都文京区）、会期は9月19日から約3か月、出品作は歌麿・北斎・春信など約120点。ぜひ見ていただきたい。